

「防災」は「報災」であって「忘災」ではない

(株)扶桑社雑誌第4編集部長

ルーシー編集長 鈴木伸子

「マッチ一本火事の元、火のよ～じん(用心)」カチ、カチ!

「子供にマッチを持たせるな、火のよ～じん」カチ、カチ!

「か～さんかまどに気をつけて、火のよ～じん」カチ、カチ!

「とうさんタバコに気をつけて、火のよ～じん」カチ、カチ!

鳥取県の中部にある小さな田舎町で生まれ育った私は、小学生時代のこの歌ともいえるようないえないような標語が『防災』と私のはじめての出会いでした。

日が暮れる頃、それはちょうど各家庭で夕餉の支度をしている頃だったと思いますが、地域の子供たち2、3人が大きな拍子木を首からぶら下げて上の標語を歌いながら練り歩くんです。ぐるっと一回りしてもせいぜい5分くらいだったでしょうか、でもそのころの私にとってはやけに長く感じられたものでした。とくに冬場は大変。いちばん端の川の近くは民家も少なく、橋のたもとでこの歌を仕上げるころは辺り一面、真っ暗闇。怖さを紛らすためにことさら大きな声で張り上げて歌ったものでした。たぶん、子供会主催だったと思いますから小学時代の6年間、雨の日も雪の日も宮沢賢治の精神でやりつづけたおかげで、40年経っ

たいまでも忘れることのできない標語となったのでしょう。

当時、怖い物の代表といえば『地震、雷、火事、親父』。そのなかでも一番身近な災害が火事でした。近くで火事でもあろうものなら大変。近所のおじさん、おばさんたちの出入りが激しくなるわ、サイレンの音はけたたましく鳴り響くわ、青年団が結成する地元消防団がサイレンの音とともに出陣するわ、子供たちはそれを覗き見ては部屋の隅で心臓の警笛を最高スピードで鳴らしていたものでした。緊急を告げるときは役場のサイレン音も猛スピード。それが治まるまではただただじっとしているしかなかったのを覚えています。とにかく火事は怖い、怖いものだ、ということは誰に聞かなくても大人たちを見ているだけで分かりましたし、ましてや自家で出火ということがどんなに大変なことか大人たちの噂話で理解できていました。

ところがいまはどうでしょう。町を消防車が走ろうが、救急車が走ろうが、そうそう気にすることがなくなったように思われます。あまりにも日常茶飯事だから?、そう片づけるには悲しすぎませんか。じゃあ、何がそうさせるのでしょうか。

今、日本には安全神話があります。戦後の

経済発展とともに危険を避けるためのあらゆる方が考えられ、人と町は守られてきました。おかげで恩恵を被ったことも多々ありました。ところがそれと同時に危険に晒されまいとする余り、危険物を排除する方向になり、結果、『危険』、『怖い物』がどんな物か肌で感じるができなくなったことも事実。いわゆる〈危険物麻痺〉になってしまったのではないかとと思われるのです。

『マッチ一本火事の元』と歌っていた頃は、マッチ一本がどんな物かも同時に知っていた時代でした。マッチの火は熱い、火傷をする、危険な物である、だから人に向けて擦るのではなく、自分に向けて擦ると言うマナーもあったことも…。

マッチがライターに変わり、かまどがレンジに変わったけれど、タバコの火や料理中の油火災が依然、出火原因の上位を占めています。

もう 15 年くらい前でしてでしょうか、『ESSE』という生活情報誌の編集現場で、業界を震撼させた一つの事件が起きました。『ESSE』は当時アメリカのグッドハウスキーピング誌と提携し、掲載する商品すべて、併設の商品研究所で商品チェックをするというのが編集コンセプトでした。そこに飛び込んできたのが当時安全な調理器具として注目され始めた電磁調理器具。ところが各社の製品を比較検査していた過程で恐ろしい事実が判明したのです。あるメーカーのある機種に限るのですが、なんと、てんぷら料理中に引火してぼうぼう燃え始めたではありませんか。温度が一定に保たれるからてんぷら料理に最適!という謳い文句にケチがついたのです。安全という大きなコ

ンセプトが崩れたのです。大事件です。編集部では記事を差し替えてでも即掲載ということになりました。よくよく原因を調べるとこれは油の量に問題がありました。ある一定の量以上で、ある時間以上揚げ続けるという条件下で起きる現象だと分かったのです。消費者の使い次第で引火を引き起こすのであるなら発表するのが使命です。結果、スポンサー主義の商業誌という立場にも拘らず、電磁調理器具に乗った燃え上がるてんぷら鍋を表紙に大きく掲載し、読者に警鐘を鳴らしました。タイトルは「電磁調理器具が燃えた!」です。

安全という衣の裏に潜む大きな危険の一例でした。余談ですが、メーカー側にもその情報を流したところ、速やかに対応していただきましたが、それから何年間、残念ながらそのメーカーからの出広(広告を出す)はありませんでした。

『防災』とは災害を防ぐことですが、それだけではない、もう一つ大事な側面があります。『報災』すなわち『災害の怖さを報(知らせ)る』ことです。防ぐために安全を追及すれば、それだけで安心してしまおう。安全という蓑をまとっていても、災害の怖さが隣り合わせであるということのを常に伝達していかなければいけません。『防災』と『報災』、この両輪がうまく回ってこそ、真の『防災』が生まれると思うのです。いっておきますが決して『忘災』なんて事にはならないように、くれぐれも注意しましょう。

「火事は心の油断から、火のよ〜じん」カチ、カチ!